花之弟子ニ成、無程慈昭院相公茶之湯師トナル、初ハ能阿彌上座ス、後ハ珠光上座ス、珠光拾七八歳迄奈良稱明寺ニ住ス、年廿五ヨリ京三條之街ニ結屋テ啓茶席、出京シテ慈昭院殿出頭ス、珠光以前、茶事往々雖有之未堪載、故珠光臺子之眞行草茶之湯之法式撰極ル、因茲珠光ヲ普系之爲茶祖已、

〔貞丈雜記六飲食〕一伊勢家は東山殿〇足利義政時代の禮法の家なる間、東山殿の茶の湯の法式傳るべしと、世間の人の云は推量違ひ也、慈昭院義政公、應仁の亂にて、世の中さわがしきによりて、東山に隱居し給ひ、さびしさのなぐさみに、御手づから茶を立て近臣に給ひしと也、將軍の御手づから立給ひし茶なる故、一椀の茶を一口づゝ呑て廻し頂戴しけると也、是は茶坊主のするわざを、御手づから時のたわぶれにし給ひし事にて、法式などを定められしにはあらず、されば我先祖伊勢守などうけ給りて、諸士に敎へ指南する程の事にてはなかりし故に、茶の湯の法式と云事、家の舊記にはなき也、今時數寄道と名づけて、ことゞ〳〵敷式法を立て、秘事口傳多く、大事の習事とする樣に成たるは、東山殿よりはるか後、秀吉公の代、天正年中の比、千利休と云者の仕出したるを、又其後片桐石見守、小堀遠江守などいふ人、色々の事を付添て、各流義を立て、遠州流、石州流などゝ云也、大名などゝ人にいはるゝ者、わざと貧者のまねをして、いやしげにせばき庵を作て、數寄屋と名付、かけ茶椀のよごれてきたなげなるに、色々の古道具あつめ、客も亭主も無刀になりて茶を立て樂とする事、武士たる者のすべきなぐさみにあらず、おろかなる遊事也、

茶會

〔太平記十九〕光嚴院殿重祚御事

建武三年六月十日、光嚴院太上天皇、重祚ノ御位ニ卽進セタリシガ、〇中略其比物ニモ覺ヘヌ田舍ノ者共、茶ノ會酒宴ノ砌ニテ、ソゞロナル物語シケルニモ、〇下略